

# コーラン解釈における廃棄（ナスフ）の諸相

## —— 一時婚の議論を中心に ——

青 柳 か お る

### 序論 —— 廃棄理論の概要

筆者は近年、イスラームの生命倫理、とくに生殖補助医療を中心に研究を進めてきた。生殖補助医療におけるドナー配偶子を認めるか否かという点において、スンナ派は夫婦間の配偶子しか認めないが、シーア派<sup>1</sup>には第三者が提供するドナー配偶子を認めるウラマー（イスラーム法学者）も存在する。その際、シーア派の一時婚という特殊な婚姻制度がドナー配偶子を認める根拠の一つとなっていることから、筆者は一時婚に興味をもち、スンナ派の婚姻制度と比較したり、一時婚に関するシーア派とスンナ派の論争について検討した。

シーア派は、コーラン4章24節（後述）で述べられている婚姻とは一時婚を指すとする。そして、一時婚を禁止したという預言者ムハンマドのハディースによっても、その章句は廃棄できないとする。一方スンナ派は、4章24節で述べられている婚姻とは通常の終生婚を指すと解釈し、もしその婚姻が一時婚を指すとしても、その章句はほかのコーランの章句によって廃棄されたとしている。また、一時婚を禁止したというムハンマドのハディースなども、スンナ派の一時婚禁止の根拠となっている。それらのハディース（スンナ）によってコーランが廃棄されるという現代のウラマーのファトワーもあることが判明し、筆者は廃棄理論に関心をもった。本稿では、イスラーム法やコーラン解釈に関わる重要分野でありながら、あまり日本では知られていないコーランの廃棄理論について、いくつかのテーマを取り上げて、ウラマーたちによってどのような廃棄が議論されてきたのかを明らかにしたい。

<sup>1</sup> 本稿では、シーア派とは十二イマーム派を指す。

廃棄についての先行研究には Burton 1996, Fatoohi 2013 などがあり、古典時代のウラマーの議論が詳細に述べられている。また現代のウラマーによる概説としては、スンナ派についてはハッラーフ、シーア派についてはイブン・ザイヌッディーンなどの法学書なかで廃棄理論が解説されている。本稿では、1) 飲酒、2) 「剣の節」(多神教徒の殺害)、3) 一時婚という三つの法学上の諸問題を取り上げ、廃棄に関わるコーラン解釈のさまざまな諸相を明らかにしたい。先行研究では、飲酒に関する章句や「剣の節」などが取り上げられているが、一時婚の章句はほとんど取り上げられていないので、本稿で詳細に論じたい<sup>2</sup>。

まず廃棄理論を概観し、具体的な事例については次の章から述べたい。なお、アラビア語では廃棄をナスフ (naskh) といい、廃棄、取り消しなどと訳されるが、本稿では廃棄と訳す。

ナスフとは、廃棄、取り消しの意であり、タフスィール学 (啓典解釈学)、ハディース学、法源学の分野に関わる理論である。コーランのなかには一見相反する記述がみられ、一方の記述が他方を“取り消し”たと解釈することでその矛盾を解決するというナスフ (取り消し) 理論が用いられる。なぜならば、アッラーは「(啓示の) どの節を取り消しても、また忘れさせても、それに優るか、またはそれと同様のものを授け (コーラン2:106)<sup>3</sup>」、コーランには矛盾がないとされるからである (コーラン4: 82)。またハディースどうしの矛盾に関しても同様にナスフ理論が適用される (大川 2002)<sup>4</sup>。

コーランはコーランによって廃棄され、ハディースはハディースによって廃棄されるという廃棄理論を多くのウラマーは受け入れているが、ハディースによるコーランの廃棄、コーランによるハディースの廃棄については、より繊細な問題を引き起こし、ウラマーによって異なっている (Burton n.d.)。ハディースとは預言者ムハンマドの言行を伝える伝承のことであり、ハディースから読

<sup>2</sup> 本稿の第三章は、拙稿「一時婚 (ムトア) に関するシーア派とスンナ派の論争 (青柳 2019)」と重なる部分も多いが、一時婚の議論を、廃棄というコーラン解釈の視点から捉え直したものである。

<sup>3</sup> コーランの和訳は、三田了一訳 1992 を参照した。

<sup>4</sup> 後述するように、廃棄理論ではコーランの章句と章句、ハディースとハディースのみならず、コーランの章句とハディースについても比較することがある。

み取れるムハンマドの範例・慣行・言行をスンナという。本稿では、スンナとハディースを厳密には区別せずに用いることにする。

概してスンナ派では、(ハディースを伝える伝承経路, イスナードが極めて多い) ムタワティル (mutawātir) のハディース (スンナ) によるコーランの廃棄は認められている。スンナによるコーランの廃棄について、(イスナードが一つしかない) アーハード (āḥād) のハディースによる廃棄は大多数のウラマーが反対している。ムタワティルのハディースによる廃棄については、マリーク・イブン・アナス (Mālik ibn Anas, 795年没), アブー・ハニファ (Abū Ḥanīfah, 767年没), アフマド・イブン・ハンバル (Aḥmad ibn Ḥanbal, 855年没) などの著名なウラマーが許可している (Suiçmez 2006, 51-52)。シャーフィイー (Muḥammad ibn Idrīs al-Shafī'ī, 820年没) によれば、コーランはコーランによってしか廃棄できず、スンナはコーランを廃棄できない。スンナはコーランに従うものだからである<sup>5</sup>。しかしシャーフィイーは、姦通罪に対する石打ち刑を支持する際、スンナによってコーランの規定が廃棄されうることを暗に認めている (Fatoohi 2013, 19-20; Burton n.d.)<sup>6</sup>。

現代イランのシーア派コーラン注釈者、哲学者であるタバータバーイー (Muḥammad Ḥusayn Ṭabātabā'ī, 1981年没) によると、ハディースによるコーランの取り消しは法源学上の大問題であり、スンナ派の多くの学者がそれを認めている (タバータバーイー 2007, 254, 注16)<sup>7</sup>。

中世のシーア派ウラマーのイブン・ザイヌッディーン (Muhammad ibn Zayn al-Dīn, 1602年没) によると、コーランの規定を確定的な伝承に基づく規定で、

<sup>5</sup> シャーフィイーは、コーランはコーランによってしか廃棄できないし、ハディース (スンナ) はハディースによってしか廃棄できないとし、コーランのハディースによる廃棄、ハディースのコーランによる廃棄に強く反対していた (Burton 1990, 32-33; Burton n.d.)。しかし、コーランの章句にある規定はほかの章句の規定と同等か優れていると言えるし、スンナにある規定についてもほかの章句の規定と同等か優れていると言えるため、シャーフィイーの廃棄理論は短命に終わった (Burton n.d.)。

<sup>6</sup> コーラン24章2節には姦通罪に対するむち打ち刑についてしか述べられておらず、石打ち刑はハディースに述べられている。

<sup>7</sup> ファダク事件 (預言者が私有していたファダクの土地に対する権利を、アブー・バクルがファティマに認めなかった事件) から初代カリフがこれを認めていたことが了承される (タバータバーイー 2007, 254, 注16)。

そして確定的な伝承の規定をコーランの規定で取り消すことが可能な点についてもシーア派においては異議を唱える者は見当たらず、スンナ派の大多数の者もこの説を支持する（イブン・ザイヌッディーン 1985, 405）。

このようにスンナ派とシーア派は、どちらもコーランによるコーランの廃棄および確実なハディース（スンナ）によるコーランの廃棄を認めているとされ、廃棄理論の大枠はあまり変わらないと思われる。

現代のスンナ派ウラマーのハッラーフ（‘Abd al-Wahhāb al-Khallāf, 1965年没）の「廃棄」の説明によると、コーランの明文は互いに他を廃棄することがあり、またムタワール（弱）のスンナによる場合もある。なぜなら、それらはいずれも確定的であり、また力において同一だからである（ハッラーフ 1984, 299）。

そして以下の例を挙げている。すべての死骸（の食用）を禁止したコーランの明文は、海の動物の死骸（の食用）を許容するムタワールの＜行為のスンナ＞によって限定され、さらに「その水は清く、そのなかの死骸の食用は適法である」という使徒の言葉で強化されている。遺言はすべて執行しなければならないことを示すコーランの明文は、三分の一を超える遺産に対する遺言の執行を妨げる＜行為のスンナ＞によって限定されており、使徒はそれをムアーズの伝えるハディースのなかで、「三分の一でも多い」という言葉で強調している（ハッラーフ 1984, 299）。

ハッラーフの説明では、同等のスンナはコーランを廃棄するとしているが、実際は、スンナがコーランの文言を限定している事例が挙げられている。現代のウラマー、ザルカーニー（Muḥammad al-Zarqānī, 1947年没）は、廃棄認定濫用派の過ちとして、例外や期限の設定による「限定（takḥīṣ）」を廃棄・被廃棄と誤解していることを挙げており（下村 2018, 241）、廃棄と限定は厳密には異なるものなので、ハッラーフの例は廃棄とは言えないのではないだろうか。

実際、ハッラーフの「一般語の限定」の説明では、コーランの一般表現をコーランあるいはムタワールのスンナで限定できるという点については、法理論学者の間で意見の相違はないとし、例として、「その水は清く、そのなかの死骸の食用は適法である」というハディースは、「汝らに禁じられているものは、死骸（コーラン5:3）」の一般を限定しているとする（ハッラーフ 1984, 250）。なおハッラーフは、限定と類似している「部分的廃棄（nashk juz’ī）」という用語

についても述べており、コーランによるコーランの部分的廃棄については例を挙げているが、スンナによるコーランの部分的廃棄については例を挙げていない（ハッラーフ 1984, 247）<sup>8</sup>。スンナによるコーランの廃棄は、実際はあまり事例がないのかもしれない。続いて、具体的な廃棄の事例を取り上げていきたい。

## 第一章 飲酒に関するコーラン解釈

まず、飲酒に関するコーランの章句を啓示された年代順に列記したい。なお、酒と訳されている語はアラビア語でハムル（khamr）といい、厳密にはワインを指す<sup>9</sup>。

「またナツメヤシやブドウの果実を実らせて、あなたがたはそれから強い飲物（sakar）や、良い食料を得る。本当にそのなかには、理解ある民への一つの印がある（コーラン16：67）。」

「かれらは酒と、賭矢に就いてあなたに問うであろう。言ってやるがいい。「それらは大きな罪であるが、人間のために（多少の）益もある。だがその罪は、益よりも大である」（2：219）。」

「信仰する者よ、あなたがたが酔った時は、自分の言うことが理解出来るようになるまで、礼拝に近付いてはならない（4:43）。」

「あなたがた信仰する者よ、誠に酒と賭矢、偶像と占い矢は、忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい（5：90）。」

5章90節が下るまでの経緯については諸説ある。シャーフィイー学派のマールディー（‘Alī ibn Muḥammad al-Māwardī, 1058年没）によれば、5章90節が下るまでの法的状態については、イスラーム以前の無規制が単に継続していたとす

<sup>8</sup> 貞淑な婦人に姦通の非難を浴びせた者に80回のむち打ちを定めるコーラン24章6節が、自分の妻を中傷した夫の場合は、むち打ちを課されることはないが、離婚されるとする24章4節によって部分的に廃棄される理由として、ハッラーフは以下のように言う。これが部分的廃棄となるのは、ただ一般的規定が一般的に、無制約的にまず規定されていて、次に一定の期間をおいて、とくに幾人かの人のために、あるいは一つの限定のために、ある規範が定められる場合だけである（ハッラーフ 1984, 296）。ハッラーフ 1984, 247も参照。

<sup>9</sup> ワインの定義や、ほかの酒も禁止されるのかという問題、また飲酒の際の刑罰などについてはさまざまな解釈があるが、本稿では触れない。酒に関する詳細な議論については、堀井 2016を参照。

る説<sup>10</sup>と、ワイン飲用の合法性を追認した啓示（16章67節）に基づいていたとする説がある。そこから一転してワインが禁止されるに至った事情についてはさまざまな伝承（ハディース）がある（堀井 2016, 143-144）。

ハナフィー学派のサラフスィー（Shams al-A'imma Abū Bakr Muḥammad ibn Aḥmad al-Sarakhsī, 1097年没）が伝えるウマル伝承は以下のとおりである。ウマル（後の第2代正統カリフ、ʿUmar ibn al-Khaṭṭāb, 在位634-644）はあるときムハンマドに対し、「ワインは財産と理性を失わせるものです。どうかワインのことを明らかにして下さるよう神に祈って下さい」と求めた。そこでムハンマドが神に祈ると、コーラン2章219節が下された。すると一部の信者はワインを絶つようになったが、有益な程度に楽しみ罪を犯さなければよいとして飲用を続ける者もいた。そこでウマルは再びムハンマドに対しさらに詳しい啓示を求めた。すると4章43節が下された。これにより、ワインの飲用が礼拝時に限り禁じられたとする信者と、その限りでないとする信者に分かれた。ウマルはその決着をつけるべく、さらにムハンマドに啓示を求めた。するとワインを明白に禁止する5章90節が下されたとされる（堀井 2016, 145; *Mabsūṭ*, Vol. 24, 2）。

この伝承の原型は、「六書」のアブー・ダーウード、ナサーイーの『スンナ集』が複数の伝達経路で伝えている。これらは、冒頭のウマルのワインに対する批判を欠くため、彼がその禁止を望んでいるかのニュアンスは明白ではなく、また登場するのはウマルのみで信者たちへの言及はない（*Sunan Abū Dā'ūd*, no. 3670; *Sunan al-Nasā'ī*, no. 5540）<sup>11</sup>。これとは別に、2章219節が啓示されたときに、前述のような信者の反応を招き、4章43節も同様だったので、ついに5章90節が啓示されたとする伝承があり、サラフスィーのテキストはこの伝承とウマル伝承とが合成されたものであろう（堀井 2016, 145）。

本来のウマル伝承に照らすと、信者たちの反応という三つの啓示の間の時間的間隔を示す要素がなく、これらの啓示がウマルの質問の場で次々と下された

<sup>10</sup> ジャーヒリーヤ時代にアラブたちが行っていたことが廃棄された例として、飲酒のほかに相続の制度がある。養子による相続、次に同盟や兄弟の契による相続が廃棄され、次に相続のための具体的な規範が定められた（コーラン4:11-12）（ハッラーフ 1984, 293）。

<sup>11</sup> ハディースについては、スンナ派六大ハディース集のウェブサイト [sunna.com](http://sunna.com) を参照した。アブー・ダーウード <https://sunnah.com/abudawud/27>, ナサーイー <https://sunnah.com/nasai/51>

ようにも読める。またこの伝承の異本によると、5章90節によるハムル禁止の報に接したウマルがその説明を求めた結果、2章219節と4章43節が啓示されたという。これらの伝承が正しければ、ワインはあるとき突如禁じられたことになる。しかし、複数の後継者（教友に会ったことのある人々）からは、2章219節と4章43節が5章90節より古い啓示であるとする一連の伝承が伝えられている。ワインが段階的に禁じられたとする立場は、関連する啓示の整合的な解釈に基づき、本来は合法物であったワインが禁じられるに至った理由を明快に説明できるため、イスラームの発展を通じて有力になったと考えられる（堀井 2016, 146）。

イスラーム法源学では、酒が16章67節、2章219節、4章43節、5章90節によって段階的に禁止され、これを規定の廃棄の典型例として紹介する。他方、中世の学者でも酒の禁忌に関する啓示が漸進的であったとしつつも、これらの節を廃棄の例に含めていない者がいる。近現代のコーラン学者はこれらの節を廃棄の例として取り上げない傾向にある（下村 2018, 225）<sup>12</sup>。酒に関するコーランの章句は、年代順に廃棄されたという見解と、段階的に禁止されたが廃棄ではないという見解に分かれていると言えよう。

前述のハッラーフによれば、16章67節、2章219節、4章43節、5章90節の順番に啓示が下され、前の啓示は後の啓示によって廃棄されたとする（ハッラーフ 1984, 293）。

一方、マムルーク朝のカイロで活躍した中世のウラマー、スユーティー（Jalāl al-Dīn al-Suyūfī, 1505年没）は、酒の禁忌に関する啓示が漸進的であったとして、2章219節、4章43節、5章90節を紹介しつつも、これらの節を廃棄の例に含めていない（下村 2018, 238; *Itqān*, Vol. 2, 22-27）<sup>13</sup>。スユーティーらが飲酒の段階的禁止を認めつつもこれらを廃棄に含めなかったとすれば、彼らは廃棄ではなく意味の限定・特殊化とみなしたのである（下村 2018, 239）。

<sup>12</sup> 下村 2018, 227の表によれば、4章43節が5章90節によって廃棄されたことを認めた学者は、ナッハース、マッキー、イブン・ジャウズイー、ムスタファー・ザイドであり、廃棄を認めなかった学者は、スユーティー、シャー・ワリーユッラー、ザルカーニーである。

<sup>13</sup> Fatoohiは、5章90節は、コーランに明文のないイスラーム以前の慣習（飲酒）を禁止したものであって、それを廃棄とは言わないとする（Fatoohi, 2013, 101）。これについては、コーランに記載されていない規定（たとえば無明時代の規定）が廃棄された場合をも廃棄に含めることは、廃棄の濫用とするスユーティーの見解と一致する（本稿第2章参照）。

イスラーム初期には、無制約に酒を飲んでよかったが、次に益のほうが罪よりも多ければ飲酒してもよいと限定され、次に礼拝時以外は飲酒してもよいとされ、最終的には飲酒は禁止されたということであり、飲酒の許容度が限定（禁止）されたとするのであろう。

以上のように、酒に関する章句が段階的に下され、最終的には酒を悪魔の業として禁止する章句によって、以前の酒を容認する章句が廃棄されたとする見解と、廃棄ではなく限定されたとする見解があると言えよう。

## 第二章 「剣の節」に関するコーラン解釈

次に、「剣の節」として知られる「聖月が過ぎたならば、多神教徒を見付け次第殺し、またはこれを捕虜にし、拘禁し、また凡ての計略（を準備して）これを待ち伏せよ。だがかれらが悔悟して、礼拝の務めを守り、定め喜捨をするならば、かれらのために道を開け（コーラン9:5）」を取り上げ、古典期と近現代という時代背景に注目しながら廃棄の問題を考えたい<sup>14</sup>。

古典期の学者が廃棄を積極的に認めるのに対し、近現代では廃棄の認定に慎重ないし抑制的であるという。その理由として、教友をはじめとする初期世代は「廃棄」という言葉を規範内容の変更というごく一般的な用語として広く用いたのに対し、後代の学者たちが専門用語として「廃棄」概念を精緻化させた結果、両者の間に意味のずれが生じたと考えられる。またスューティーは、廃棄の濫用の原因を、1) まったくの誤認、2) 限定と廃棄の混用、3) コーランに記載されていない規定（たとえば無明時代の規定）が廃棄された場合をも廃棄に含めたこととしている（下村 2018, 229; *Itqān*, Vol. 2, 22）。

「剣の節」を原因とした廃棄に関し、古典期の学者がこれを認めるのに対し、近現代期はまったく認めていないのは対照的である。スューティーの頃には廃棄に関する理論の精緻化が進んでいたため、スューティーが「剣の節」の濫用は過ちであると指摘しているのは、純粋に学問の深化によると考えられる。他方、

<sup>14</sup> 本節は、主に下村 2018を参照した。

<sup>15</sup> 下村 2018, 227の表によれば、スューティーは、コーラン2章217節、5章2節、60章10節の三つの節が「剣の節」によって廃棄されたとしている。

当時のイスラーム世界は政治、経済、文化、軍事面で力を失っておらず、古典期に属するスューティーが「剣の節」による廃棄を三件認めている<sup>15</sup>のは、イスラーム世界の現実的な力の存在がその背景にあるのではないだろうか（下村 2018, 229）。

現代のウラマー、カラダーウィー（Yūsuf al-Qarāḍāwī, 1966年生）によれば、確定的な根拠なしに廃棄を認定する一群の学者たちがいる一方、コーランにはそもそも廃棄が存在しないとする学者たちもいるが、両者の中間を行くのが、明白で真正な根拠があり、理性的にも心理的にも納得のいく場合に限って廃棄を認める立場であり、これが現代の中道的ウラマーの立場である（下村 2018, 229）。

カラダーウィーによれば、多くの注釈者たちは、「英知と良い話し方で、（凡ての者を）あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論しなさい（コーラン16:125）」、「あなたは忍耐強くあれ。あなたの忍耐は、アッラー（の助け）による外にはないのである。かれらのために憂慮しないで、またかれらの策謀したことのために、心を狭めてはならない（16:127）」、「かれらの言うことを耐え忍び、かれらを離れよ、立派に身をかわせ（73:10）」といった寛容、忍耐を呼びかけ英知による宣教を説く多くの章句が「剣の節」によって廃棄されたと言う。しかし9章5節は、預言者に敵対し、策謀し、盟約を反故にし、信仰者たちに無慈悲に振る舞うアラブの多神教徒に関する規定である（下村 2018, 231）<sup>16</sup>。

カラダーウィーの議論は、1）現代の中道的ウラマーは廃棄の認定に慎重である、2）イスラームの「寛容性」を説く論者は廃棄の認定を避けるのに対し、イスラームの絶対的優位性と峻厳さを強調する論者は「剣の節」による廃棄を主張する、3）どれが「剣の節」であるか合意はない<sup>17</sup>、4）「剣の節」は無限定な原則論として解釈されるべきではない、5）啓典は全体が有機的に理解されるべきである、とまとめられる（下村 2018, 231-232）。

比較的明るい展望を有していた古典期とは違い、近現代は常に強者たる西洋という他者を意識せねばならず、古典期にも存在した「剣の節」による廃棄へ

<sup>16</sup> Yūsuf al-Qarāḍāwī, *Kayfa Nata'āmal ma'a al-Qur'ān al-Azīm*, Cairo: Dār al-Shurūq, 2000, 329-331が出典となっているが、原典確認できなかった。

<sup>17</sup> 「剣の節」とは9章5節とも、「多神教徒が皆でああなたがたと戦うように、（あなたがたも）皆で戦え（コーラン9:36）」とも、双方を指すとも言われ一定しないという（下村 2018, 231）。

の慎重論はより強くなっている（下村 2018, 243）<sup>18</sup>。

しかしながら、「剣の節」は寛容や平和を説く多くの章句を廃棄したとされているため、現代のテロリストによって利用され、イスラームの名のもとで残虐な行為が行われているのである（Fatoohi, 2013, 8）<sup>19</sup>。

以上のように、多神教徒の殺害を命じる「剣の節」が、寛容や忍耐を説くほかの章句を廃棄したとするウラマーは古典時代には多く、また廃棄される章句も多かったが、近代以降、イスラーム圏と西洋の力関係が変わってくると、寛容や忍耐を説く章句は廃棄されないとする解釈が多くなってきたと言えよう。ただし、現代でも「剣の節」による廃棄を支持する者たちもいて、他宗教の信徒たちとの対立や戦いを煽る原因ともなっている。

### 第三章 一時婚に関するコーラン解釈

#### 第一節 コーランによるコーランの廃棄

一時婚とは、婚姻期間（ajal）と婚資（ajr）を条件とする婚姻契約のことであり、数時間、数日間、数年間のように、期間を明確にすることが特徴である<sup>20</sup>。

コーランで一時婚の根拠とされるのは、メディナ期初期に啓示されたという以下の文言である。「かの女らと、交わった（istamta‘tum）者は、定められた婚資（ujūr）を与えなさい。だが婚資が定められた後、相互の合意の上なら、（変更しても）あなたがたに罪はない（コーラン4:24）。」

すべてのシーア派と一部のスンナ派のウラマーは、この章句、とくに「istamta‘tum」が一時婚の許可を意味するとしている（Murata 1987, 51）。スンナ派では、この章句の一般的な解釈は、一時婚ではなく普通の婚姻を指すとされる（Heffening n.d.）。

<sup>18</sup> しかし、一部の現代の宗教指導者たちは、イスラームは不信仰者たちの信仰箇条を尊重することはなく、彼らは迷妄にある火獄の徒であるほか、背教者は処刑され、「宗教に強制はない（コーラン2:256）」などの章句はすべて廃棄済みであるとしており（下村 2018, 230）、このような理解（慎重論）が宗教関係者の間で共有されているとは言いがたい（下村 2018, 243）。

<sup>19</sup> ただしFatoohiは、「剣の節」は寛容を説く章句を廃棄していないとしている（Fatoohi, 2013, 121）。

<sup>20</sup> 一時婚の概要については、Haeri 1989, 51-59参照。

スンナ派も、初期の頃には一時婚が許可されていたことに同意しており、先に述べたコーラン4章24節について、一時婚の許可を指すとするスンナ派もいる。しかし彼らは、その章句はコーランのほかの章句によって廃棄されたのだとする（Murata 1987, 54-55）。

スンナ派のファフルッディーン・ラーズイー（Fakhr al-Dīn al-Rāzī, 1209年没）のコーラン注釈書『大注釈書、不可視界の鍵（*al-Taḥfīf al-Kabīr wa-al-Mafāṭīḥ al-Ghayb*）』では、まず「預言者よ、あなたがたが妻と離婚する時は、定められた期限に離別しその期間を（正確に）計算しなさい（コーラン65章1節）」によって4章24節は廃棄されたという見解が述べられている（*Taḥfīf*, Vol. 10, 52）。終生婚では（離婚後の）待婚期間は、3回の月経（コーラン2: 228）もしくは3か月（コーラン65: 4）であるが、一時婚ではそれよりも短く、2回の月経とされる（Haeri 1989, 57; 60）。待婚期間の日数が終生婚とは異なっているため、一時婚は廃棄されたとされるのである。

さらに、スンナ派のクルトゥビー（Muḥammad ibn Aḥmad al-Qurṭubī, 1273年没）の注釈書『コーラン判断の集成（*al-Jāmi' li-Aḥkām al-Qur'ān*）』では、「かれら（信者たち）は、自分の陰部を守る者。ただし配偶者と、かれらの右手に所有する者（奴隷）は、別である。かれらに関しては、咎められることはない（コーラン23章5-6節）」によって、ムハンマドの妻のアーイシャ（‘Ā’ishah, 678年没）やその他の者たちが、一時婚の章句は廃棄されたとしている（Murata 1987, 55; *Jāmi'*, Vol. 5, 130）。

コーラン23章5-6節によれば、性交渉を行うことができる女性は妻か女奴隷であるが、一時婚をした女性は、妻でも女奴隷でもない。というのは、もし彼女が妻であれば夫婦はお互いの財産を相続するが（コーラン4: 12）<sup>21</sup>、一時婚では相続が生じないからである（Murata 1987, 55; *Taḥfīf*, Vol. 10, 52; *Jāmi'*, Vol. 5, 130）。コーラン23章5-6節によれば、終生婚をしている妻か、所有している女性奴隷以外とは性交渉を行うことはできないため、当然一時婚は許されないということになる<sup>22</sup>。よって23章5-6節は、一時婚禁止の根拠となるし、またもし4章

<sup>21</sup> クルトゥビーは、コーラン4章12節（夫婦相互の遺産相続の章句）によっても、一時婚の章句は廃棄されたとしている（*Jāmi'*, Vol. 5, 130）。

<sup>22</sup> 松山 2018, 312-313にも同様の説明が述べられている。シーア派のコーラン解釈については平野 2018, 337-339参照。

24節が一時婚を指すとしても、それを廃棄する章句となる。

現代イランのシーア派ウラマー、タバータバーイー (Muhammad Ḥusayn Ṭabāṭabā'ī, 1981年没) はコーラン注釈書『秤 (Mīzān)』の4章24節の解釈において、以下のように反論する。一時婚を廃棄するとされる23章5-6節はメッカ期に啓示されたものであるが、4章24節はヒジュラ後のメディナ期に啓示された。よって、先に啓示されたものが後に啓示されたものを廃棄することはできない (Murata 1987, 56; *Mīzān*, Vol. 4, 274)<sup>23</sup>。またスンナ派は、一時婚による妻は合法的な妻ではない、というのは、コーランの章句によって合法的な妻は遺産を相続できるからであると言う。しかしシーア派はいくつかの例外もありうるとする (Murata 1987, 56)。タバータバーイーは、相続の章句や待婚期間の章句と、4章24節との間には、廃棄する、廃棄されるという関係はないとする (*Mīzān*, Vol. 4, 274)<sup>24</sup>。

## 第二節 一時婚に関するハディース

一時婚に関する預言者ムハンマドのハディース<sup>25</sup>には、以下のようなものがある。

まず、一時婚はイスラーム以前のジャーヒリーヤ時代のアラブの慣習であり、ムハンマドが認めていたというハディースがある。

・カイス (Qays ibn 'Āsim, 670年没) は伝えている。アブドゥッラー・イブン・マスウード ('Abd Allāh ibn Mas'ūd, 652・53・54年没) はこう語った。「私たちは、アッラーのみ使い (ムハンマド) と共に遠征したが、その折、女性は何れも連れて行かなかった。それで、私たちは (冗談に) 『去勢すべきではなかつ

<sup>23</sup> 『秤』のウェブサイトは、<http://www.alseraj.net/maktaba/kotob/quran/almizan/almizan4/f5-4.htm> 参照。そのほか、コーラン4章25節、24章33節では、結婚する資金のない者は女性奴隷を娶るか、自制するように説かれており、一時婚をするようにとは説かれていない。

<sup>24</sup> またタバータバーイーによれば、一時婚はムハンマドの時代に禁止されることはなかったし、カリフ、ウマルの時代にも広く実践されていた。コーラン4章24節は取り消されたという見解は認められない。そして男性の衝動によって引き起こされる害悪を最小化するために、一時婚は容認されるとしている (タバータバーイー 2007, 227-230)。

<sup>25</sup> ムスリム (Muslim ibn al-Hajjāj, 875年没) のハディース集の和訳は、磯崎定元ほか訳のムスリム 1987、ブハーリー (Muhammad ibn Ismā'īl al-Bukhārī, 870年没) のハディース集の和訳は、牧野信也訳のブハーリー 2001を参照し、一部改訳した。

たのですか』といった。み使いは、それを否定なさったが、そのあと、女性に衣服を与えることを条件に、特定期間を定めた一時婚の契約をかわすことをお認めになった。……（*Ṣaḥīḥ M*, Vol. 4, 342; ムスリム1987, 2巻, 438）。」

この他にも、ムハンマドが一時婚を認めたという伝承が多数存在する。

しかし、このように認められていた一時婚を、ムハンマドが禁止したというハディースもある。たとえば、以下のようなものがある。

・イブン・アッパースは以下のように言った。「ハイバル（Khaybar）遠征<sup>26</sup>のとき、預言者は一時婚とろばの肉を食べることを禁じた（*Ṣaḥīḥ B*, Vol. 7, 36; ブハーリー 2001, 5巻, 29）。」

・ムハンマド・イブン・アリーは、彼の父アリー（‘Alī ibn Abū Ṭālib, 第4代正統カリフ, 在位656-661）より聞いて、以下のように語っている。「預言者は、ハイバルの日に、一時婚を契約すること、および、家畜用ろばの肉を食べることを永久に禁じた（*Ṣaḥīḥ M*, Vol. 4, 345; ムスリム 1987, 2巻, 444）。」

・ラビーウ・イブン・サブラ（Rabī‘ ibn Sabrah）は、彼の父から聞いてこう伝えている。「アッラーのみ使いは、メッカ征服の日、女性と一時婚の契約を結ぶことを禁じた（*Ṣaḥīḥ M*, Vol. 4, 344; ムスリム1987, 2巻, 442）。」

ここでは、ハイバル遠征の日（628年）もしくはメッカを無血開城したとき（632年）に、預言者ムハンマドが一時婚を禁止したとされる。

### 第三節 スンナによるコーランの廃棄

古典時代のラーズイーの議論では、これらのハディースは一時婚禁止の補強として述べられていたが、コーランの文言を廃棄するという説明はみられなかった。

現代のスンナ派のウラマーは、一時婚についてどのような反論をしているのだろうか。ファトワー提供ウェブサイト Islam Q and A における一時婚に関する質疑応答をみてみよう。

なお、Islam Q and A の創設者・監修者は、サラフィー主義者のシャイフ・ムハンマド・サーリフ・ムナッジド（Shaykh Muḥammad Ṣāliḥ al-Munajjid, 1960-）

<sup>26</sup> 628年、ムハンマドは、メディナのユダヤ教徒のナディール族が住むハイバルに遠征した。

であり、本節は、スンナ派のなかでもとくにサラフィー主義者の見解の分析である。

「一時婚とそれを許可するラーフィド派（シーア派）<sup>27</sup>への反論（Mut'ah marriage and refutation of those Raafidis who permit it）」というファトワーには、以下のように述べられている<sup>28</sup>。

質問：イスラームにおける一時婚の概念について教えてください。……どの法学派がそのような概念を信じているのか、コーランとハディースを引用しながら教えてください。

回答：ムトア、つまり一時婚とは、金銭を払う代わりに、ある男性がある女性と特定の期間、結婚することを意味する。結婚の基本的原則は、それが永続するということである。一時婚は、イスラームの初期の時期には許されていたが、廃止され、最後の審判の日までハラーム（禁忌）となったのである。

・アリーは以下のように言った。「ハイバル遠征のとき、預言者は一時婚とろばの肉を食べることを禁じた（*Ṣaḥīḥ M*, Vol. 4, 345; ムスリム 1987, 2巻, 444)。」

・ラビーウ・イブン・サブラ・ジュハンニーは、彼の父の話をこう伝えている。彼（サブラ）がアッラーのみ使いと一緒に折、み使いは「人々よ、私は、あなた方に女性と一時婚の契約を結ぶことを許した。しかし、今や、アッラーは、審判の日までそれを禁じられた。それ故、この形式によって女性と結婚した者は、その女性と別れて自由にやりなさい。あなたたちが彼女らに贈った物を取り返してはなりません」と言われた（*Ṣaḥīḥ M*, Vol. 4, 343-344; ムスリム 1987, 2巻, 441）。

神は結婚を、私たちを熟慮にいざなう徴とした。神は夫婦間の愛と信愛

<sup>27</sup> シーア派については、しばしば「ラーフィド派（拒否者）」という呼称も使用される。アリーのひ孫であるザイドがアブー・バクルとウマルの正統性を否定しなかったことに異議を申し立て、ザイドを「拒否」して離れた者たち、および、そこから発生したもろもろの分派を指す（松山 2016, 121）。ラーフィド派は十二イマーム派以外のシーア派も含んでいるが、ここでの議論では一時婚を認める十二イマーム派を指していると考えられる。

<sup>28</sup> <https://islamqa.info/en/20738>

を創造し、妻を夫の平静の源とした。神は我々に子どもを持つように促し、女性に待婚期間を守り、相続することを命じた。この禁止された形態の婚姻（一時婚）にはそれらの要素はなにもない。

一時婚を許されるとするラーフィド派、つまりシーア派によると、一時婚をした女性は、妻でもないし愛人でもない。しかし、神は以下のように言われている。「かれら（信者たち）は、自分の陰部を守る者。ただし配偶者と、かれらの右手に所有する者（奴隷）は、別である。かれらに関しては、咎められることはない（コーラン23: 5-6）。」

ラーフィド派は、一時婚は許されるという彼らの議論を補強するために、不正な証拠を引用する。たとえば、彼らは以下の章句を引用する。「かの女らと、交わった者は、定められた婚資を与えなさい。……（コーラン4: 24）。」そして彼らは以下のように言う。この章句は、一時婚は許されることを示している。そして「定められた婚資」という言葉こそが、「かの女らと、交わった者は」という句によって意味されているのは一時婚であることの証拠なのである。

これに対する反論は、以下の事実である。この文言の前に、神は結婚が禁止されている女性について述べ、つぎに結婚が許されている女性について述べ、そして結婚する女性に婚資を与えるように命じているのである<sup>29</sup>。……婚資はここでアジュル (ujūra-hunna) と言われている。しかしこれは、一時婚の契約において一時婚をしている相手女性に男性が支払う金銭を意味しないのである。アジュルという婚資について、神は以下のように言われている。「預言者よ、われがあなたの妻として許した者は、あなたがアジュル (ujūra-hunna) を与えた妻たち……（コーラン33: 50）。」このように、この章句（コーラン4: 24）が、一時婚が許されることを示唆する証拠はないのである。

<sup>29</sup> コーラン4章24節の前半は、以下のとおりである。「またあなたがたに（禁じられている者は）、夫のある女である。ただしあなたがたの右手の所有する者（奴隷の女）は別である。これはあなたがたに対するアッラーの掟である。これら以外は、すべてあなたがたに合法であるから、あなたがたの財資をもって、（良縁を）探し求め、面目を恥かしめず、私通（のよう）でなく（結婚しなさい）。」

たとえ我々が、もしこの章句(4: 24)が一時婚は許されることを示唆していると言ったとしても、一時婚は、復活の日まで禁止されたことを証明する真正なスンナにおける文言によって廃棄されたのだと我々は答えよう。

ここでは、まず初期の時代に行われていた一時婚が廃止された根拠としてハディースが列挙され、コーラン23章5-6節も引用されている。続いて、コーラン4章24節が一時婚ではなく終生婚を指すことを確認した上で、もし一時婚を指すとしてもコーランの文言を真正なスンナで廃棄できるとされている。先にみたラーズビーの議論では、コーラン4章24節が一時婚を指すとしても、この章句はほかの章句によって廃棄されたとしており、コーランの文言はコーランの文言によって廃棄されている。

本稿序論で述べたように、概してスンナ派でもシーア派でも、(イスナードが極めて多い)ムタワティルのハディース(スンナ)によるコーランの廃棄は認められている。このファトワーの回答者は、ムハンマドのスンナによってコーランの文言を廃棄できるとしている。スンナによるコーランの廃棄の具体的事例は非常に少ないようなので、この一時婚のコーラン解釈は珍しい見解なのかもしれない。先述した古典時代の論争では、4章24節をハディースによって廃棄するという議論はみられなかった。それに対し、このファトワーでは、コーランの文言がコーランではなくスンナによって廃棄されるとしている点が特徴と言えよう<sup>30</sup>。

シーア派の反論は以下のようなものである。現代イラクで活躍した模倣の鑑(marja' al-taqlid)であるフーイー(Abū al-Qāsim al-Mūsawī al-Khū'ī, 1992年没)は、『コーラン注釈における証明(*al-Bayān fī Tafsīr al-Qur'ān*)』において、まず先述したラビーウ・イブン・サブラが伝えるムハンマドが一時婚を禁止したというハディースについては、伝承経路が複数あるとはいえ、ラビーウ・イブン・

<sup>30</sup> イスラームでは一時婚を認めないのだから、一時婚を認めるシーア派はイスラームとは別の宗教とみなしている点も興味深い。現代ではサラフィー主義の台頭という時代風潮のなかで、サラフィー主義に特徴的な解釈が流布していると推察できるのではないだろうか。

サブラという一人の教友からしか伝わっていないハディース（wāḥid）であり、ワーヒドのハディースによってコーランの章句を廃棄することはできないとする（Murata 1987, 63; *Bayān*, 320）。

また、アリーの伝えるムハンマドが一時婚を禁止したというハディースは真正ではないと言う。なぜなら、すべてのイスラーム教徒によって一時婚はメッカ征服時に認められていたのに、その3年前のハイバル遠征で禁止されたとアリーが言うのは理不尽だからである（Murata 1987, 62-63; *Bayān*, 321）。

以上のように、シーア派は伝承者が一人の教友にしか遡れないワーヒドのハディースではコーランを廃棄できないとする。またシーア派の初代イマーム、アリーの伝える一時婚を禁止するハディースは、偽物であるとする。

## 結論

本稿では三つのテーマについて、廃棄の事例を取り上げてきた。

1) 酒については、時代的に古い飲酒を容認する章句が、時代的に新しい飲酒を禁止する章句によって段階的に廃棄され、最終的に「悪魔の業」として禁止されたとされる。しかし、段階的禁止を認めつつも、前の章句が後の章句によって限定されたと解釈し、廃棄されたとはい解しないウラマーもいる。

2) 「剣の節」については、イスラーム教徒が優勢だった前近代においては、多神教徒の殺害を命じる「剣の節」が、ほかの章句を廃棄したとする立場が多かったが、状況が変化してきた近代以降は、「剣の節」はほかの章句を廃棄しておらず、多神教徒との戦いを避けようとする解釈に変わってきている。ただし、「剣の節」による廃棄を唱えるウラマーや過激派も存在する。

3) 一時婚については、コーラン4章24節をどのように捉えるのが争点となっており、スンナ派とシーア派の言い分は違っている。スンナ派は、4章24節は終生婚を指すとし、もし一時婚を指すとしても、4章24節はほかの章句によって廃棄されたとする。また確実なハディースによっても廃棄されたとする見解もみられる。一方シーア派は、4章24節は一時婚を指すとし、ほかの章句は時代的に先なので4章24節を廃棄することはできないとする。また一時婚を禁止するハディースは弱いハディースであるから、コーランを廃棄することはできない

と言う。

このようにコーランの廃棄については、ひとつのテーマにおいてさえウラマーの一致した見解はないと言えよう。それぞれのウラマーの、廃棄とするか意味の限定・特殊化とするかという解釈、前近代と近代以降といった時代背景、そしてスンナ派とシーア派という宗派の違いなどによって、さまざまな解釈がみられるのである。

\* 本稿は、平成27～30年度科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号15K02056）、平成28～30年度科学研究費補助金（基盤研究(B) 課題番号16H03538）による研究成果の一部である。

## 参考文献

### アラビア語文献

- Bayān*: Abū al-Qāsim al-Mūsawī al-Khū‘ī, *al-Bayān fī Tafsīr al-Qur’ān*, Tehran: Dār al-Thaqarayni, 2000.
- Itqān*: al-Suyūfī, Jalāl al-Dīn, *al-Itqān fī ‘Ulūm al-Qur’ān*, 2 vols. in 1, Beirut: Dār al-Fikr, n.d.
- Jāmi’*: Muḥammad ibn Aḥmad *al-Qurṭubī*, *al-Jāmi’ li-Aḥkām al-Qur’ān*, 20 vols. in 10, Cairo: Dār al-Kitāb al-‘Arabī, 1967.
- Mabsūṭ*: Shams al-A‘immah Abū Bakr Muḥammad ibn Aḥmad al-Sarakhsī, *al-Mabsūṭ*, 30 vols. in 15, Beirut: Dār al-Ma‘rifah, 1986.
- Mīzān*: Muḥammad Ḥusayn Ṭabāṭabā‘ī, *al-Mīzān fī Tafsīr al-Qur’ān*, 20 vols. in 10, Qum: Manshūrāt Jamā‘ah al-Mudarrisīn fī al-Ḥawzah al-‘Ilmīyah, 2009.
- Ṣaḥīḥ B*: Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Ismā‘īl al-Bukhārī, *Ṣaḥīḥ: The Translation of the Meanings of Shahih al-Bukhari Arabic-English*, 9 vols., New Delhi: Kitab Bhavan, 1984.
- Ṣaḥīḥ M*: Muslim ibn Ḥajjāj, *Ṣaḥīḥ: Sahih Muslim Arabic-English*, 8 vols., New Delhi: Adam Publishers & Distributors, 2008.

*Tafsīr*: Fakhr al-Dīn al-Rāzī, *al-Tafsīr al-Kabīr wa-al-Mafātīḥ al-Ghayb*, 32 vols. in 16, Beirut: Dār al-Fikr, 2002.

\* プハーリーとムスリムのハディース集以外のスンナ派六大伝承集については、[sunna.com](http://sunna.com)を参照した。

\*\* 本稿で参照したウェブサイトの最終閲覧日は、すべて2019年1月11日。

## 英語文献

Aoyagi, K. 2017: “Assisted Reproductive Technologies in Islam with Special Reference to Twelver Shia,” *Studies in Humanities* (『人文科学研究』), Vol. 141, 1-20.

Burton, J. 1990. *The Sources of Islamic Law: Islamic Theories of Abrogation*, Edinburgh University Press.

Burton, J. n.d.: “Naskh,” *The Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> ed. Version, CD-ROM.

Fatoohi, L. 2013: *Abrogation in the Qur'an and Islamic Law: A Critical Study of the Concept of “Naskh” and Its Impact*, New York: Routledge.

Haeri, S. 1989: *Law of Desire: Temporary Marriage in Shi'i Iran*, Syracuse: Syracuse University Press.

Heffening, W. n.d.: “Mut'a,” *The Encyclopaedia of Islam*, 2<sup>nd</sup> ed. Version, CD-ROM.

Murata S. 1987: *Temporary Marriage (Mut'a) in Islamic Law*, London: The Muhammadi Trust of Great Britain and Northern Ireland.

Suiçmez, Y. 2006: “Abrogation in Hadith,” *American Journal of Islamic Social Sciences*, 23-4, 33-56.

[https://www.researchgate.net/publication/268506778\\_Abrogation\\_in\\_Hadith\\_alnaskh\\_fy\\_alhdyth](https://www.researchgate.net/publication/268506778_Abrogation_in_Hadith_alnaskh_fy_alhdyth)

## 日本語文献

青柳かおる 2015: 「生殖補助医療に関するスンナ派イスラームの生命倫理」『比較宗教思想研究』15, 19-41.

青柳かおる 2016: 「イスラームにおける生殖補助医療——シーア派を中心に」塩尻和子編『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』明石書店, 186-207.

青柳かおる 2017: 「イスラームにおける婚姻制度の諸相——スンナ派のミスヤール婚とウルフィー婚, シーア派の一時婚（ムトア婚）」『比較宗教思想研究』17, 1-21.

青柳かおる 2018a: 「イスラーム・スンナ派における生殖補助医療への批判」『比較

- 宗教思想研究』18, 1-21.
- 青柳かおる 2018b:「イスラームにおける生命倫理の諸問題」『東洋学術研究』57/1, 5-33.
- 青柳かおる 2019:「一時婚（ムトア）に関するシーア派とスンナ派の論争——古典時代から現代まで」『イスラーム思想研究』1（掲載予定）.
- イブン・ザイヌッディーン（村田幸子訳・解説）1985:『イスラーム法理論序説』岩波書店.
- 大川玲子 2002:「ナスフ」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 706.
- 下村佳州紀 2018:「クルアーンに残された古い規定——「廃棄」か「忘却」か?」松山洋平編『クルアーン入門』作品社, 223-246.
- タバータバーイー, モハンマド=ホセイーン（森本一夫訳）2007:『シーア派の自画像——歴史・思想・教義』慶應義塾大学出版会.
- ハッラーフ, アブドル=ワッハブ（中村廣治郎訳）1984:『イスラームの法——法源と理論』東京大学出版会.
- 平野貴大 2018:「シーア派のタフスィール」松山洋平編『クルアーン入門』作品社, 321-346.
- 堀井聡江 2016:「シャリーアにおける飲酒の是非——イスラーム的規範の多元性」『宗教研究』90/2 (386), 131-154.
- ブハーリー（牧野信也訳）2001:『ハディース——イスラーム伝承集成』（全6巻）中公文庫, 中央公論新社.
- 松山洋平 2016:『イスラーム神学』作品社.
- 松山洋平 2018:「スンナ派のタフスィール」松山洋平編『クルアーン入門』作品社, 289-316.
- 三田了一訳 1992:『日亜対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会.
- ムスリム（磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳）1987:『日訳サヒーフ・ムスリム』（全3巻）日本ムスリム協会.